

搖

曳

歌集

摇

江苏工业学院图书馆

藏书章

武井忠夫

武井 忠夫

昭和2年1月19日 甲府市に生まれる。

昭和19年3月 山梨県立甲府中学校卒業

昭和23年3月 北海道大学 予科卒業

昭和27年3月 〃 医学部卒業

昭和28年3月 国立相模原病院インターン修了

同年 6月 〃 小児科研究医員

昭和32年3月 〃 小児科医局員

同年 3月 学位受領

昭和42年4月 国立相模原病院検査科医長

昭和44年4月 武井小児科医院開業

住所 〒228-0814 神奈川県相模原市南台5-15-6

電話 0427-44-1018 武井小児科医院

揺 曳 ようえい

平成10年1月19日発行

著 者 武井 忠夫

編 集 太陽学院出版

〒240 横浜市保土ヶ谷区和田1-20-20

印 刷 サン・プリンティング・システム

製 本 田島製本所

ISBN4-925033-09-3

序
文

西
郊
文
夫

武井さんの直像

真夜更けて息なお荒し意識なき老い母の痰また吸引す

意識失せ睡る米寿の母のなお生くる証あかしと尿滴りぬ

富士の秀はに朝日さし初め意識なき母に侍はべれる長き夜は明く

平成二年一月十二日、作者の郷里甲府に住まわれる母堂タネさんは、脳梗塞の発作で倒れ、緊急入院をされた。相模原から馳せつけて、昼夜を必死に看取る武井さん。

思いきや下顎呼吸に息荒く意識の失せし母蘇る

意識失せ旬余を経たる老い母に命還りて粥啜るなり

会うごとに意識還りて肌つやの戻れる母は声挙げ笑う

高齢でもあり、意識喪失の長引くまま下顎呼吸の荒い容体を、切なく見守るなか、旬日の余を経て奇跡的に意識を取り戻された母上でした。喜びが溢れる極致の歌。

正月を家に戻れる病む母は畳に臥せし悦びを言う

惣菜を母の好みと取り分けてまたフリーザーに収めぬ妻は

臥す母の看とりを託し妻を遣りぬ脚病む朝に雨降りしきる

言挙げず我に代わりて母見舞う妻や己が分身にして

亡き父の好物なりき笹子餅を母々メズラシクとまた口開く

平成三年元日、外泊の許しを受けて一年振りに我が家でくつろぐ母堂、子や孫に囲まれたその日は九十歳の誕生日でもありました。神奈川から山梨まで、近いとは言え診療の忙しさのなかを折々に自ら見舞い、また奥様を差し向けるのですが、「妻や己が分身にして：」と、よくぞ言い切ったもので、その信頼の厚さと、それに応えて母上の好みの食事の支度や看護の万端に心を込める武井夫人慶子さんの姿。家族ぐるみの献身に支えられて母堂は平成五年の夏までを乗り越えます。強靱な生命力です。

唇に寄すプリンの匙に繰り返し口開く母は呼べど答えず (平成五年二月)

思いきや倒れし母を三度また桃咲く里に見舞わんとす (同 四月)

一筋の涙光れり三歳ごし命たゆたう老い母にして (同 七月)

応えなき母を見舞える戻り道月翳りなく山の端に冴ゆ (同)

母堂、武井タネ刀自は同月享年九十二歳の天寿を全うされた。武井さんは宿痾の股関節症を外科治療すべく決断し手配していましたが、急遽母上の元へ馳せたのです。

卒然と倒れしままに三歳経ぬ眠るがにして母逝き給う

我死なばこれを伸ばせと自らに選べる母の写真顔佳し

ふるさとに夏雲湧けり梅雨の間のさやけき蒼空に母天翔けぬ

充実されたであろう生涯を了えられた母上への、賛歌ともいうべき一連の感慨は、まさしくこの歌集『揺曳』の焦点であり圧巻であります。ご自分の葬儀の遺影をも心に掛けて指図された気丈な母堂の胸中には、恵まれるもの多かった一人の女性としての、この世への感謝と満足がみなぎっておられます。さもあれ梅雨の合間の蒼穹に、世俗から解放された面影を仰ぐ武井さん。「ふるさとに夏雲湧けり…」は、その境地の象徴ともいえるべく万感胸に迫る言葉となりました。

ハネ橋の白きを渡り仰ぎ見ぬ巨き風車の青空に舞う（オランダ・キンデルダイク）
ゆるやかに風車の廻る運河べり釣り人二人動くともなし（同）

遠ちこちにカリヨン鳴りぬさすらいの旧き煉瓦の夕暮れの街（ブルージユ）

白き家より尼僧の二人歩み出でぬニレの木立のローンに沿いて（ベギン修道院）
本棚で隠せる裏に小部屋ありいたいけな少女日記綴れる（アンネの家）

冒頭の一首、風車の歌は、昭和六十二年八月、武井家恒例の夫人同伴外国旅行にオランダベルギーを訪れた時のもの。作歌は初めてという人が、旅のつれづれに成った六十余首のうちの数首を神奈川県医師会報の短歌欄（神医歌壇）に投稿したところ、この一首が見事に上位に入選し、時の選者助川信彦より、「初心者とは思えぬ老練な（つまり年期の入った）ひらめきのある歌……」との好評を頂いた。これが契機となり励みとなって、以来旅行詠を主軸にこの歌集が成りました。忠実な医師であり論理的な科学徒である武井さんの作風は、自ずから事物事象に、愛情と客観冷静を合せ持つ視線を注ぎます。歴史と風物への豊富な学びがこれを裏付けて穢りある旅行記の如く、読者を異国の世界へ誘い込みます。注目の東欧、ハンガリーや東ドイツは昭和六十三年で、そそりたつベルリンの壁を直視していますし、ニュージーランドやアラスカへ

もご夫妻の足は弾みます。勢い世界情勢にも敏感で、湾岸戦争へも危惧の目を向けるのです。その足跡の幾つかを辿りましょう。

くろずめる壁・石畳古き街にローマ遺跡の入り混じりける
(ブダペスト)

旧き庁舎の仕掛け時計に死神の鐘鳴らしつつ刻告げにける
(プラハ旧市街)

ベルリンの西の櫓やぐらに列をなし東を見やる人ら声もなく
(西ベルリン)

北大のキャンパスに似て巨き樹の翠豊みどりけきハーバード大学
(ボストン)

静もりて教会ありぬキャンパスの木陰白亜の塔浄く立つ
(同)

牛群れる牧野広がり雪山のかがようかなた虹たちわたる
(ニュージーランド)

土ポタルの光妖しくきらめきぬワイトモ洞を進む船の上
(オークランド)

面おもてあげしムース(へら鹿)の角の雄々しかりアラスカの野に独り歩める

訪れて、東西対立のベルリンの壁を見、人間の生々しさを痛感して来ただけに、後日、平成元年十二月、その壁の崩壊を知った驚きは言うまでもありません。

ベルリンの壁に向かいてひたぶるに鑿振るう民の眼差しは燃ゆ

巨き歴史のページ繰るごとブランデンブルグ門を隔てし壁の今開かれぬ

永久に人閉ざすと見えし東西の壁いま潰え人ら相抱く

平成三年一月、湾岸戦争が勃発し、貴重な人命と人類の財産が無駄に失われました。

各々に億費費やしミサイルを撃つミサイルの戦空しく

油井燃え海はまみれて十万の命の失せし戦了りぬ

黒々と油打ち寄す海の辺にもがける鳥の眼の円らなる

国内各地への周遊は、気軽に出かけられ、従って見聞も多く、豊富な旅行詠が読む人を楽しませます。が、探訪の目的地も武井さんらしい好みがあります。飛騨、木曾路、萩、津和野路、白馬高原、秋色北海道、忍野など、歴史と郷土色豊かな地方がご夫妻の好適の旅です。また京都・奈良など古都の風情にも魅かれます。年度を追ってその風雅な感慨に触れて見ましよう。

綾錦もみじ織りなす平湯より残んの月を山の端に見つ

(飛驒)

竹すだれ提灯飾る古き町をみたらし団子喰いつつ行く

(高山)

雨しとどなお降りやまず岩国の錦帯橋際つつじ華やげり

(岩国)

雨上がりの津和野の街の夕もやに灯のにじみけり白壁通り

(津和野)

老松も小松も交じえはろばると続く唐津の虹の松原

(肥前)

フランシスコ・ザビエルの碑の高みより平戸の海は澄みて蒼めり (平戸)

天を指し左手に平和希うとふ長崎の像白日に立つ

(長崎)

脂あぶら浮く水飲み命永らえしと児の拓碑立ち水清く噴く

(長崎)

川の面もにさ霧たゆたい霜白く葦の穂波を抜きて富士立つ

(忍野)

京都、奈良、そして鎌倉と古都への慕情、よき歴史を持つ日本人であることの自覚と誇りは、武井さんにとつていま改めて論ずる必要はないのです。

薮戸しんぐわに金の金具に京御所の雅みやび俣ひばゆにん仁和寺の堂

(仁和寺金堂)

小格子に杉玉吊るす漬物しにせの老舗見いでぬ京の夕まぐれ

(村上重本店)

とりすます舞妓の稀えまに笑うとき白塗りのした稚な顔見つ

(祇園)

大原の旧きみ寺の池の面を千々に彩り紅葉散り敷く
(寂光院)

愁いつつ伏目に緘き手を伸べてあえかに在す百済観音
(法隆寺)

それぞれに子ら手を離れ妻と来し長谷のみ寺にボタン咲き充つ
(京都長谷観音)

落ち葉焚く煙流れて鎌倉の旧き大鐘鳴り出でにけり
(鎌倉五山)

さっさつと鳩群過ぎて夕陽映え巨き銀杏の黄に輝やけり
(鶴ヶ岡八幡宮)

ところで、武井さんは昭和十九年三月に郷里の山梨県立甲府中学校(旧制度)を卒業し、はるばると北海道大学医学部予科に進まれたが、奇しくも、私も又同時期に茨城県立日立中学校を出て横浜市立医学専門学校に入ったので、激動の昭和を共に過ごした同時代人としての縁の深さを思わざるを得ない。まして貧疎な時代にこそ、多感な青年は心の豊かさを求めてゆく。その底には人間への憧憬と期待がある。加えて、よき師、よき友、よき家庭を得た武井さんの詩的感性は潜在意識として次第に、そして着実に育まれたのでしよう。作歌に具体的な日常を見出だしてから十年の間に一千七百余首を詠じられた営為は、まさに驚嘆に値する文学活動であり、歌人としての確かな業績となりました。

学び舎を出でて四十の歳過ぎぬ百余の友ら北に集える
(北大)

クラークの像に寄り立ち仰ぎ見ぬ四十年は束の間にして

青柳町、ロシア教会、赤煉瓦港の街に旧き夢追う
(函館)

国敗れ昏き世なりき学び舎の行き来に乗れる船逝かんとす
(青函連絡船)

激しかりし世の移ろいを今更に想い返しぬ昭和逝ける日
(昭和逝く)

我生きて六十路を経たる昭和の世今し了りて世は改まる

若くしてみまかれる姉の詠み草を二十年経てワープロに打つ
(姉静子さん)

いつしかに歌に惹かれて亡き姉の遺せるノートしみじみと見き

初孫の誕生近し飛驒の旅にでんでん太鼓ふと買い足しぬ
(初孫)

初孫の知らせ届きぬ朝日さしツワブキさやに咲き初めにけり

やわやわと心もとなきみどり児のひたぶる我に依りて睡れる

健やかな孫の育ちを母子手帳に記しとどめぬ小児科医われ

常になく途に座りて抱けと泣く幼き姉の嘆き背に見つ
(孫二人)

医師としてわが子出で発つ佳き朝にバラ咲き群れて耀いにけり
(子息研二さん)

頬寄せて乳を飲む児をさしのぞく二人の姉らいとけなくして
(孫三人)

前述したように武井さんには、宿痾とも言うべき変形性膝・股関節炎による左関節痛が母堂のご発病の頃から酷くなり、曲折の挙句、平成五年七月に母上を見送った直後、人工関節の埋設を含む根治手術を受けたのです。闘病記録とも言うべき一連の歌が、この第一歌集『揺曳』の末尾を印象し、深い感動となつてゆきます。

山行きの夢は絶たれて病む脚をかこちて歩む朝な行く道

コンコンと槌打つ音をさながらに聴きつつさらに痛みなかりき

六十余年に擦れし骨頭とり去られサイボーグめく装置写れる

つとしばし頬寄せ妻は帰り行きぬ手術し臥せる我を見舞いて

力こめ我が車椅子押す孫のやさしき心胸熱く受く

診療と普請見舞いに気配れる妻は限度と我に寄り泣く

妻は掃除を我は犬曳く朝毎のならい戻りぬ二月を経て

多年の関節症を克服されて四年の星霜が過ぎました。診療に遊行にそして短歌にと、武井さんはこころ足らう日々を送られています。そして、

さやかに虹湧き立ちぬ相模なる大山の峰截るがごとくに

と、何時頃からか武井さんは、神奈川県央の丹沢の山並み、特に大山を愛でて歌に詠むようになりました。数年後に世に問うであろう第二歌集には、第二の故郷である相模の山々や川の流れ、百合やかたくりの花々、夕茜さす湘南の海に舞う水鳥の姿が叙情ゆたかに歌い上げられていましてあります。とまれ、共に「神医歌壇」の同人として交際をいただき、歌を通して武井さんの率直にして謙虚なお人柄に接していることを大きな喜びとしてペンを擱きます。

平成九年十二月 横浜市金沢にて

〔潮音〕幹部同人・神医歌壇選者

目次

序文 西郊文夫 2

昭和六十二年（一九八七）

オランダ・ベルギー紀行

飛騨・木曾路周遊

初孫を詠える

北大医学部卒後三十五周年

鎌倉秋日

義母法要

昭和六十三年（一九八八）

静子姉を偲ぶ

青函連絡船終航

三浦半島にて

萩・津和野旅情

尾瀬清遊

ホタル舞う

67 64 61 60 58 56 53 51 48 43 34 18 2

東欧紀行

鎌倉にて

万座・志賀周遊

富士スカイライン

昭和六十四年～平成元年（一九八九）

相模原貯水池

昭和逝く

曾我梅林

早春

脚萎えし少女

浜松の風揚げ

バラ薫る朝

カナダ・メープル街道と米国東部歴訪

高尾山にて

ベルリンの壁崩る

平成二年（一九九〇）

母病む

西九州周遊

119 114

110 109 99 98 96 94 91 89 87 86

82 79 77 69